地理細論集 五本 三四

内閣文庫
和書 類
第 八二四九 號
五 函
八二 函
六 架

太政官文庫
和書門 類
八二四九 號
一〇八 函
一 架
五 冊

内閣文庫		
番號	和	8249
冊數	5 (2)	
函號	182	109

地方

日本政府圖書
内閣文庫
五八四二巻

地理細論集巻之三

目録

一 地方根元沙汰箇条之次第（根源之事并田畠経従の往之）
一 附録
一 手代指南之事
一 小毛見之事并不定仕様之傳
一 地方異法舊集之弁
一 同更元之事
一 地方豊凶年之弁
一 田畑名目之事

日本政府図書

明治十三年購求

一 刈取り坪之籾ニ而
一 諸国石代之事
一 地方一揆記之事
一 関東郷石五斗代之事

一 田圃永説ニ出ル

地方検見記御取箇之次第

地方落穂集曰上々田名箇之儀ハ籾九斗五升ニ而事ハ関東方ニ七

上田一反之内ニ而石盛十三之訳ハ（中ニ）分米壱石五斗ニ而と四分ニ積り候

五升六斗ニ当り候と積り申候ニ付

検見ニ検見と云ハ貢迄ニてすとき村ニ手々而ハ

取ル出し重宝記ニハ起り右箇ハ三石盛三ツ三分ニ而

村ニ而ハ三尺とのしとありて検見ニいてす能り又ハ田ニ而

五合五勺の詳ニ有之

平日右文の正しき五斗米六斗ニ当り六斗ニ六

坪ニ付而文検見の村ニ而ハ皆とのぬきし是ニ而分

一　苗一反三百歩ニ一歩数壱束の時ハ一反数三百束
〆壱石五斗ニ而此苗ニ一反の人足三十人植付手数ニ而
七合五勺也是を以ハ不足なれハ細密ニ植付ハ粮入
候而も又一石ニ植壱斗程代農家代九四斗弐升
五合合数六斗壱歩ニ数弐合五勺也此米三斗余と
石盛壱石五斗ニ而田方ハ川地壱石弐斗ニ而是を七合
五ヶ〆一反六斗余ニ而是を壱石五斗の割ハ四合余迄
是を植其土地壱升ニ当る迄成とハ三ヶ之の間ニ一ヶ如斯ニ而
併今の前条を以ニ而も用ひ候ニ而植替ハ少有無の
方川ニハ用ひ候得共用ひ候品々ハ難至合候
也其方川可然是ハ事務ニ議定六四民一ヶ年

ニ付一歩ニ弐合毛々五勺毛とても少々相成候ハ苗程
内積もりニ而品々の割合ニ而ハ一反七斗五升ニ而当る
ニ而ニ而も一ツの違ひも無之ニ而と存候未割
其ハ当ハ縦横の如何様ニ考候へ
又田理屈ニ而ハ如何ニ而も土地の石盛相付苗一歩の隠如
数壱升ニ而地方ハ三百坪壱歩の一石五斗数三石ニ而候ニ付手番
相の様ニ大凡壱束壱石五斗と十分の盛ニ而植付壱束の五斗七斗
百姓とハ不足ニ而九分ニ当る是と定積の植之と三町歩の
之ニ一体と申勘定ある理屈ハ一分却三分の植付九分せ十ニ而
米穀難ニ而理屈九分百姓是困窮如く石盛相付候ハ此等
刈数の様ニ而米一概ニ土地ハ難植付十分石盛ニ而難相定也

出し新治ニ石盛と云ハいつとし検地ニ用来し定法也田畑ニ
（石盛極メ候ハしかとも右定ハ畝刈籾とハ石盛之極ニ候由ハ惣中ニ而定候事）
而ハ石盛を付ル時ハ畝刈籾の検見ニ而考候上又手様ニ付村
方の地味ニ而山方里方海辺町場ニ而も田畑ニ作り候上等級ニ而
陸田ニ而も畑ニ而も其所ニの考ニ而畝刈籾の様の所を石盛
（上々田五歩内の中ニ而ハ大和国ニ而も又の）
二十五六関東方田盛たとへ二十七八小盛越前盛たとへ二十七八まれの
（石盛をかけ候ニ付而ハ其所々ニ而考候）
石盛之さし也し（而石し）ハ畝刈籾の様ニ而極る石盛ニ無し而其ニ書る
石盛之と云ハ右の極ニ而ニて田畑の考ニ而極れの田法ハ右
箇所余の惣ニ而ニ筆ニハ難定也

按ずるに石盛の事ハ村高ハ其ニ而其の郷帳迄の所ハ右より
浮石盛ニ而其ハ其処石盛ニ極り候共不申候
又石盛ニハ其との替りて其之別ニ如此

の外ニ石盛と云ハ一反ニ付十石の籾なとゝ云ふ事ハ
石盛ハ反取の事なれ共合如十ニ当ハ其合ニ難知か故ニ十
分一田ニ而又京ニ石盛を極メ出し候の事を離れ候之外の事ニ而又盛
書と考へ候と云ハ極して小の事田との取の所ニ有
関東甲州抔の石盛ハ其ての外ニ定ニ有之候ハ
下々田と作り又麦作畑と作り法と申候稲の実之
甲州ニ二段ニ有ハ誤也甲州ハ一万力石盛ハ
稲作ニ付而ハ一万力分ハ麻田畑ニ蒲田其外青苗ハ
一二ニ而ハ田方ニ毛作之二毛作の場ハ一毛ハ畑作之様
一作ハ田作し候とハ右石盛之十ニ而上方
関東ハ本作ハ畑作ハ畝刈の上に上段

何絹ニても何絹何月改与申付越ハ定法ニ而何百匁之絹
此代ニ而数を調候も田方分ハ揚数ニ懸り九ニ数の割合
ともれ石数を出し　掛目を除候而二十三十の石数ニ
是也引立候
一　壱貫一反　本郷作し
七三十目
根之本
様十二匁
十匁七分
十分之位
二一五三
石数之
作し
―――――
一時数十七匁
様ニ五匁時
八時ノ掛目
行方ハ付置
細見ハ時ノ様ニ
七三十目
新日細の様時の方五匁ヲ掛壱匁ヲ□とつくる時ハ三時全ハ弐伯ニ
三匁八文目ニ本郷様以半分を壱貫目与申右壱貫
之く十七貫之し三時之口半八分
右本郷本一反ニ拠十匁之し八口半八分ニ七匁本之内弐匁口半
ハ三分取出分余り四保口半之但拠一ツ半伯三分除メ弐匁口半
口八之也
一　四疋　口貫三百弐拾目　但賃銭
一　五疋　口根三貫弐百目　但同断
此月七拾弐分
但一分六百目之様なし
右七拾弐分を探銭ニ而も九七拾弐分但ハ之し上方而ハ六百目と
探銭ニ而弐百分之余り之し之ハ甲州ニハ百五拾匁之百七拾四匁也

右之外ニ余業無御座候

一 木綿売捌弐ヶ所

此代銀百〆目　但一ヶ所ニ付五拾〆目ツヽ

此数四万三千弐百反　但 拝借数一ヶ年ニ三万四千三百反

此売弐万三千六百反　但四分合積ヲ以

此代銀百〆目　但壱反ニ付目方何程ツヽ

右数ハ某家之一ヶ年之数抜ニ而一ヶ年之余業目の数四万三千弐百反之内
四分合積ニ而在来之数壱万六千八百反則余業之余業ハ右
並ニ而其一之在並ハ村方之者ニ而御座候者共ハ右並ニ千之
ニ而御座候ハ右ニ而別段ニ而在並ニ而右之段ニ而御座候
之通ニ而右並三十九三十七八反御座候

一 又同甲州木綿一ヶ所六百〆目　定綿

大和　一ヶ所弐百目程　ツヽ

摂津 河内 和泉　一ヶ所弐百弐拾匁　ツヽ

右ニ追而記之候

同甲州ハ一ヶ所六百〆目　定綿之

此積綿百目程

和州ハ一ヶ所六百〆目　ツヽ

摂州 河州　一ヶ所六百〆目

坪刈

[illegible]

右坪苅ハ其所ニ而坪を抱き刈取り [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一

[illegible]

[illegible]観察と云ハ村民之盛衰を外ニ見て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

先[illegible]

[illegible]

[illegible]

地方功者の手代付ケ

村方ニて[illegible]十ケ年[illegible]

毛之刈　水損　旱損　天水　用水　溜池共

右継様も一村ニ書出ニ付御伺ニ而御座候ハヽ其段御届

皆済之入

田畑古検新検　縄法ん　中ゟ之
検地之法　不同　反歩之高之儀

瀬分ヶ杭　或ハ耕地切坪洪水ニ而古以ヶ外ヶ絵図面之
百姓ゟ之も中之歩刈分之ニ有之候

田方之坪ハ三間四方坪之二ツも坪歩ニ作ル不同ニ坪之段
歩刈之ハ畝之儀推之畑方坪刈も坪刈ル時之坪

村鑑義　見分之儀ハ之ニ歩之を之候
分のヶ之と相之

歩刈　年貢之取坪升ニ而曲尺　合タラ　但六尺之
坪格之　千歩ニ坪之有り田之
田ゟの名

検見道　定免年之書付を用ル之入
ヶ方百姓之ハ之ヶ用ニ付

立毛之見分　風水損ニ而見之候　指　一毛指　立稲
壱坪ニ坪之刈取之候　坪数之ゟ　坪之ヶ刈取之　并ニ坪ヶ之
坪之坪之之坪之　青田　水腐

畑方立毛　二毛作の類　雑穀　其外色々之儀

百姓　作毛之儀生立之様之　立毛と之ヶ有
耕作之ハ之ゟと之ゟ之

和作入組　百姓之持高之分有之

浦役屋　在之ニ而御年貢を之ヶ大豊と歩刈ヶ有

覚書

検見之儀ハ年貢取箇ヲ極メ候儀也検見仕候事之儀ハ
其内百姓下見坪刈合不合ヲ見分坪刈致候事

附録

百姓之心得之事

勤メ懈怠と 心得 云合ル

老農ニ諸作

検子ヲ算ル

田畑之事 検物貢数 諸作之儀 検撰ハ能ク見て

作り物之法

商売ノ山川棟 海辺ハ漁也

其ニハ一ケ年之ト計ヲ以テ算ル

初見分

前ニ坪刈ノ仕法検見ト可ノ川筋

検子酒見ニテ坪刈ノ事

御料ニテハ御代官私領ニテハ地方役人ト云合ル

手代検見之事

元文年代ヨリ当分ハ検見ニ出役ノ節ニ羽

播州佐渡検見の節中務人

宿ニテ耗毛多少有ルト割ルモ

大通之見分

立毛能不宜ヲ見テ坪刈ノ所ヲ撰メ定ル

依ル坪刈ニテ立坪刈ニテモ見ル

取分帳

百姓方ヨリノ取分帳上中下ノ坪刈人ニ毛付合セ

上中下仕分ケ壱町ニ付何程ト仕立候事

検見ノ節ノ儀

村方坪刈

上中下ニテ四段ノ刈坪数ヲ毛刈ル

又刈所ハ村方ニテモ見ル

毛見下ニ而見分合候　小百姓ニ而ハ不合候小百姓ハ
小毛見取百姓ハ不残取候也

永荒場改　初ゟ見分合ニ付万事同様之事
川欠山崩砂入　流川之事
田畑成　畑田成　新開切添　桂地場見分之場所之一反合候

手代検見之事

先觸状　人足何疋
伯百姓毛見分之事ニ付
下見帳田場之札
継立代弐人又ハ三人足仕　組頭之事

百姓下見帳　百姓拙者内事ニ人足作為百姓ニ而も
下見ニ出候ニ書付仕候　合附帳

合毛見合附　下見之上合毛改之通ニ而相除村名主
川ゟ候川ゟ二三合毛拾候　触知矢

但鰥寡孤獨困疾ノ者ヲ小毛見ニテ赦様了簡
持病

毛見賄方　日数三年日壱月前後前ニ逢
賄の仕方之事手厚ニ致し候様ニ逢候之

毎日之札　刈毛ニハ札を添上ニ年下ゟ之伝之与
田坪字田ニ名ニ名壱ヶ所

坪刈　春日穂刈坪ニ以　坪中升ニ一丈一坪の
稲株の穂数一坪の籾数一升の籾合を減之也

右之外見田水田揚田新田古稲の分ハ刈
取の所ハ田場字四足名所稲種二件刈取へし
取 但海辺苗場并居村際植付場等無之
稲ハ取ましき事

其見取遣候村ハ三反四反ハ刈取候ハヽ刈取
へきもの時の所にて取へし 合毛の札被付すへきもの也
宅に出候役人土居并居村之村々者人々の目利候
して其の毛の目安と申ものを
其歩刈の内にも合毛高の分々其に能く心得
其外惣而用ひ候とも心得すへし
右見分心得

初追晩 早稲 中稲 晩稲
風損損ハ入ハ下ス入遣ス稲モ早キ合ニ遣シ入候分
早キ稲ハ植付稲出来宜入批（ミヨリ ウアスニ）
田刈苅田晩田椎田山陰山陰并川水周り
天水水入稲損（たまり） 稲不足 ミヨリ 田刈稲出不
前ハ見ノロ 一穂上リ 立稲 ヤリイ子 チヤンく 青稲 枯死 稲損不実
右心得へし

秋見廻リ見分の心得 見立し能くと心得 其外見合候見分田方の取分

水入場見分 稲の上ニ水冠 水丈ニ附候所不作
右之水損 右附しき所ハ入念に

毛見勘定　一日ニ反毎ニ坪入毛付毛附不足無之様仕方
明ケ候ニ而も仕合毛ハ何程ケ附ニ違作ニ候哉

畑方作毛見分

三草　麻　木綿　藍　煙草　藺　紅花大豆

右等之類

果　茶　楮　漆　桑　其外梅柿柑類等毛見

雑穀　野菜之類

田方毛付見分ハ稲毛之善悪ニ寄附ハ畑方別段ニ而有間

所ニ而得

田成畑　畑成田　荒場　右ハ追々見分ニ而新規ニ取計候事

小毛見之事并見立仕様之事

切坪見　刻り　投毛見　他　水腐新田等毛付見附之事

毛探　右之内坪刈之事ハ毛附ハ遊田分
作毛ニ依之事ハ可成丈ケ勘弁之事

凡小検見ニ而ハ三毛之善悪を能分ケて田畑共ニ上中下之
石盛ニ応じ平見ハ百姓之取箇前ニ而斗代ニ至迄之有
之事ニ小百姓の取方如何と相考ハ小検見之事ハ宛
只今は小検見之仕方ニ而百姓之心得て
困窮の根元と成るの也ハ其ニ宜と云ハ百姓を甘やかし
之を能々勘弁し損切方ニ随って検見の時の可及見込也

百姓往古能ありしに皆出さへなれハ迚へしと仰られし
よりこそりて役人も百姓も出ておりてなし扱ひも百姓
北方にしてハ遠方に如何なれハ随て扱ひの作法も
出来すしても万事入てしめすに及ひかたし云々すへて事にてさ
定まる事ハ上下の役人先ツ自分なく共てして百姓エ
下知し

一 百田方にて是通例にて其外に能々言に勿論心次第
こくまゝならぬ事是非可有之をも男も人
能様之日々扱三ヶ条如何して以前ハ只末百石
三以下ハ勤百石に草とめ扱ひを三ヶ村も百石もあるよし
つゝし

一 検地書に屋敷ハ数扱ひもなりまする六ハ只扱ひし
地方言聞并ニ表屋敷三寸とハ高さ言付候を割に三ヶ歳
畝分歳屋に扱て其家屋にも用ひ名屋敷ニ其中上下ハ一ッの法
にて歳屋敷屋と用ひハ至急扱て村毛に用ひ云々
右ニ云人を村毎の屋敷ヶ所に如何も扱ひ下知用にも
法ともいふに事と云

日家記類書に屋敷ニ屋も扱ひ下知用ハ右
法にて何もとハ以ての外来ハ只歳ニ仕方もなく屋
として用ひもいふ事にて村毎ハ屋敷ハ以下扱ひニ
右来ハ先年より兩て何様ニ以下もの言ありまし
寛文二丑年頃以後右へ何様も扱ひ申候由

三分后浅手なるハ一尺五寸ニ入て五寸に地を
ミ尺ゟして壁土にても新田で壁土と唱へ来る
如くし

又曰 壱反九畝歩ハ高六石六斗 又壱石五斗壱升代 年々
三分壁土ハ高弐石壱斗五升代 右畝歩ゟ高壱升減し
捨り候 又々地ニ地味ゟ田地の如くし 是ハ畑方ゟ
地の為に上げ地して壁土と付地不畑地等
壱斗代と云壁土と出し 上々年高付の為にハ高
弐斗五升代と云壁土と出し 壱ヶ高畝の比地方
壱斗高代ニして壁土と出しても壁土と申
以上の高石弐斗五升代と如く高壁の事
經ヶ経て

私曰 壱反代ハ高米壱斗の年の〻〻門十八九年の比
高石壱斗五升代と如し と云ふて壁土して
六ヶ敷事に公儀 永続の比地地ゟ坪の事に如
元洞如の事ハ往し仕らに仕の壁し 壁畑年毎高
壱斗の地面地代る地の如ゟ如し 今日壱畝壱
加く六ヶ敷如の如し 古人ヶ修し 凡し上ハ坪
経て行て外壱ゟ是も見ゟ是高の坪ゟれに如
ヘ一

一 右田方御番
地方並法集に云 関東ハ高壁 上方ハ壱ヶ高壁とハ云来

一 田米ニ而壱分之文ハ壱石弐斗五升之代ニして今年の
直段と云ハ壱石ハ弐石五斗代ニ而○十ハ十ケ年平均ニして右
壱石弐斗五升代ニ当るを以弐石五斗代と云ふ代ヲ以四ツ壱
割壱石弐斗五升代とハ右代ハ八分割ニして四ツと云ハ八ツ半
三ツ四ツとして云ふ右とハ八ツ半ツと直段也とえ
此升ハ如何ニ直段ハ直段の役所ニ而の流れ 書付ニ
米法集のみ云壱石弐斗五升代ハ右ニ十ケ年の
平均ニハ何国ニ而も九ツ也○直段ニハ何国も直段ハ
（右何国直段ハ高田の京米所ニ而も入るも方と
言ふてもうつるの如れハ壱石弐斗五升と言ふ也して
一 米壱俵直段ニ付あるも先と云ふても門ニ来テ如何

是ハ米直段ハ穀物より起り其ハ古キ言葉なるを経年
直段と云ふハ上下之ハ高附の品々を田ニして当とハ
言ふし
一 右も此等ハ数多有之
和田上方ハ反ニ付石高ニ而高免上中下の分ケあり
村高ハ直段を云ふハ免国役ニ畑方も下の如く也
米方斗の直段如何と言ふ直段ニ而右之此等の米数
毎年高ニ而一村内ニ而其年の米是ハ畑方ニ而田ヲ以
石ニ当る石代古法と云ふ根元ハ年田ニ地方
之法葉ニ在し如是し
又 田直段ニ事

上方の名目を定置候ニ付實事の名目を立候共ニ付
上方ハ名目を主として實事ハ五割を見とするにもあれ
あるへし

一 関東方畑年貢田方ニ准 東方ハ畑ニ貢定ある田方ハ取米畑
方ハ永の定法ニて反ニ永何程といふ事あるへし 但ハ
上田一反七斗五 中田一反六斗五升と 大方五升九上中下
の石高七斗九よ 位
上畑一反永弐百五拾文九
中畑一反永弐百三拾文九
下畑一反永弐百拾文九
大方上中下の石高取文而仕付乙寸而ハ様九ニ上中下の石高

然ハ大阪の者の主法ハ帳面ニ元来古法ハ年貢を積出
ありと上方ハ畑ニ貢ありと方田畑共ニ年貢の定法ニ定置何事を
申ニ而ありといふ
上田一反の石盛十五ニて一反の石高壱石五斗ニなる
右石盛の時ハ一反ニ七斗五升ある
中田一反の石盛十三ニて一反の石高壱石三斗ニなる
右石盛の時ハ六斗五升ある
下田一反の石盛十一ニて一反の石高壱石壱斗ニなる[illegible]
右石盛の時ハ五斗五升あるへし
右石盛之上中下の名目の石高七斗[illegible]
一 如斯上中下石盛の[illegible]

捨米ニ而上方直ニ而買候米ニ石ニいたし候得ハ上米ハ
其ニ而中より今の石高と如く買米ハ取高より石高も
如くなるへし
右田取米ニ買米田方ニ取米ニ而細方ニ取米と斗ニ合也
取方ニ米方の取米ハ何ケ出来るか細方ニ取米ハ為ル
年々此多少と算ニ而すへし

三斗三升五合六斗
上田一反歩　　石盛十五
此取米六斗
外三斗ハ　　　三石五斗
米六斗ハ
種代人食地代農具代百姓取分
取ニ而のこ百姓作徳と取なし

メ三石六斗　　石盛十
三石三斗
上畑一反歩
此取米六斗　　三石五斗
此代ハ取永百文　　五斗五之
外取百文　　百姓作徳
右畑方ハ人足ニ而抜扱ニ而取方例ニ而百姓取分ニ二毛
作も三毛作も作るへし壱ケハ稲之一件ニ付
抜米ニ内買高ハ取ニ而分りの分りニ付ハ此理
之も法集ニ而見るへし
又田買米方ニ而取扱たしニハ取ニ合ニ而田畑米取ニハ

かうしまうる又ハ元と田地を元ニ致し候ても帳面にて元反別を記し
候ても宜しき事にて上方の田畑作りなしに田畑反別ハうつし置き候
ニ成ふと帳面ハ元の反別を記し置てハ宜しき事ニ候

田畑名目の事

田畑名目ハ土地の品ニ随ひ往古ハ上中下下々の田畑と計の名
目ハ有りしが近来の名目ハ夫々の名を以て段々多くなりし也

一 田方

蘭田　麦田　麻田

是ハ通例上の位ニ一段上之地ニ而其土地中の位ニ付候ニ
上々麦田中麦田下麦田ニ位付いたし上麦田ニ石盛ニ而中麦
田ハ中の石盛ニ下麦田ハ下の石盛ニて上るニ蘭田ニ准じ

作り取りて其跡を作る麦田麻田ハ右も作之

見取田　砂田　悪地ヶ田　山田　谷ヶ田　楚地田

是ハ通例上中下下々と位の外ニ取候を名目とて是ヶ所ニ下
ミる所ニ見取田ハ悪地の内ニ而も少しにても取れ候所を見取
砂田ハ砂地ニ而耕作成り難き悪地ヶ田ハ別名目
の通りし山田谷ヶ田楚地田ハ何れも場所耕地の名ニ而
通例上中下下々の位ニ付ても其名ニ而是ハ其地名を付
通例の位ニ付候てハ其土地ニ而名を付置候ニ位を付
しとの事

沼田　深田　湿田　流作田

是ハ位の名目ニ而何れも水の名ニ沼田深田とする

一 出田ハ無之年出田ハ田方の無石ニ而作田作田のことく
あらまし耕地ニ而年々出作ニ而極田ハ山方ニ而地面の所々
の不作之時と云て極のことくの所ニ而同田ハ前々の耕地也
流作田ハ川通地面ニ而高く不損する所ある時ハ不出
の年ハ三五年ニ而も又収納する事也

苗代
是ハ種を蒔苗を生し新田大切也

桂田
是ハ名ニハあらし桂田の遠くにある桂田ハ苗代往之
なる苗代桂之田として通例也

麻田
是ハ苗代ハ不植麻を蒔ニ而麦の跡ニ麻を蒔て庄之下
地を定麦ハ不作とり麻田

摘田
地を能耕し而して後種を蒔穴をあけ穴ニ種を摘
種を摘て文庄ニ定ニ而麦ハ桂田のことく
麻田摘田ハかくのことし

田云ふ事ハ桂田ニ不限地ニ麦を蒔夏ニ種蒔候ハ水のかゝき
時ハ此田ニ麻田摘田として冬ハ畑の如く作り候ハ麦蒔る
ことなし

一 畑方
桑畑 楮畑 漆畑 茶畑 麻田
麻 藍 紅花ヲ三草と云
桑 楮 漆 茶ヲ四木と云
民用第一之物ニして夏作物を植る事ハ年中の稀地故
桑楮ハ上畑の石盛ニ而も上畑十二三ツ又ハ
十三ツ程も麻茶ハ上畑の石盛ニ而もしきなし
見付畑 砂畑 悪地畑 山畑 野畑 麻生畑

焼畑　薙畑　切畑　林畑　萱畑　萩畑　藪畑

右ハ皆凡例上中下下々と位を極むることも名目とハ替り
焼と下々ニ而至て軽きものニ而名目畑林畑草地下々畑因方
と称し畑之地方ニ而山畑・切畑ハ又ハ野原地畑ハ全
荒地畑ニ而稼方ニ拾荒ニ而なるといふハ所ニより何れ列而
焼畑又甲州の山方小荷生畑ハ山方地方の名目ニ而年季ニ而
二十年と限りて年季ハ草場ハ切畑ハ切替畑ハ
山地ニ而山ニ而年季ニ而五六十年も作りて其土地
荒れ作毛実のり悪しきと稼方の事を切替て
作るなり少々の年季ニ而山畑といふなり是も切替
畑之林畑以下名目の如しと知るべし

流作畑　　田方解ニ記す

按ずるに田畑名目の大概右の如し此外にも名目ハ数
多あれども凡ハ右に准じて知るべし又畑の字も畠の字も二字
共ニ本字ニ而ハ無之日本ニ而作りし字ニ而唐土の字ニ圃の字
をもちふ田ハ田畑の無差別ニ用ひし也田ハ田畑の無差別に用ひし
畑の字を用ひて田方と分ちて時ハ水田といひて東坡ニ仁和
寺事ニ大学の博士と文学の如くと旋
田と記すなどの例ありて是は田畑と称しかたし
古く田方とハ水田と唱へし
或人云晋書ニ曰畠収至十餘斛水田収数十斛とあ
白田ハ畑の事にて二字を一字にしたるなり文字ハ

つくり畑の字も火耕水耨と云熟字も是田と水畠
と分けて極りたる名字如斯 尤古法に上方三分三厘
方三分五厘宛 東畑方等分と極りし以来上方ニ三分一歩納
置候所 畑方ニ而ハ又ハ畑方ハ石代の場合とへとは
古来以来法の如く如斯
下掛ニ上方分出水ハ少無用水ニ而候ニ付 山方自
八月の月の中迄畑方三分一程の掟にて二月と細目
如其もの一統ニ平等ニ加兄ニ三分一ハ安石代の定法
是し田列ハ皆石高千石ニ畑之方の内も石列を
法様ニ定の善在列の甚た二分ノ七分ノ是
同前にて定有之も売石様ニ之納る事も

六ケ敷ニ付石ニ直候事ニ成り今之法の如く石列ミハ三ケ所の
古法の名目ハ何も皆極山中ニ而有しも其年切古道
の内知なしハ定る中とに而当年との作法之り是のとおく定ま也の
畑方ニ而有るも取箇ともしとなり皆なりて三ケ取ニ而是ちなく
定メ法有るとの之出来取甲列ハ上方之御甲列ニ而少也なる
者ゆへ成取石五斗入此様の年の候ニ付 一石代の様ハ地理
ニて法宛ニ定め事くとて先此之し

割付米法之事

一 割付米ハ大ニ石盛ニ而両手前年月ニ而上方定東米吉月遣之
地方合同年ニ而関東方ニ而法者出以て○前に両月限○ニ而成
後ニ以て年貢割付ニ而ハ地方ニ而上方分而ハ○貢米ニ而ト口

一　免わりつけの事

據手之免割付とハ田畑上中下の位別に免を割付
事なるを大概割付するを本途といふハ高を平均に免を極め
一両毛作ハ畑作の位によりて名をかへて申なり今たとへハ
上なとにて田に作る事也○貢への年貢といふ事　又これといふハ
田畑ともに悪地を此年ハ三分一通ゆるめ畑方田方割物石高ともに
其の位を定め給りて免割に成事あり　なかの
其割付先の外別に年貢取免定高を定めて
其村の割付帳面ハ名主庄屋の家にて預り置
よろしくそれそれを後にみる事なれハなり
右田緑也成否ヲ今迄のそれハ成其の後ニ

当年手前遣之甲州之田の分ハ左之通
甲州山梨郡何村
一　高五百石
一　此分弐百石
二ツ五分五
一　高三百弐石五斗
川欠新田
一　米九石七斗五升
二ツ三分五厘
外
一　米三斗弐升
見付田
反ニ壱斗六升五合
一　米壱斗七升
見付畑
反ニ三升五合

一 正徳二午年　山本
伺相済文言
右之通伺年中相済九月十日ニ相極候也
伺
十月　伺之通
右之伺書之人銘々共弐ツ之人々ニ而其由を記し
諸国石代之事
諸国石代ハ古きより承る時代の遠近如下

一 地方一様記ニ云
一様記ハ古キ役人ノ所撰ナリ記者ノ性名不傳其書苗
蕪混雑ニテ見悪キ故ニ外解ヲ書

関東弐石五斗代
上方三分一浜口様ノ金替
下総之内者三石替
奥州 白川 会津 其外 三石弐斗替
同 越後 七石替
同 仙台 七石替
出羽 米 六石替田畑検地之上金納
摂津ニ而ハ諸国石代高ニ而右村々之不足之分ヲ見合石代ニ云

又云太閤以前ハ諸国之事ニ而 関東諸国の田地古代
の遠法ハ壱反ニ付弐斗ならて取納申候所を
此三代ハ此一俵の取斗ハ壱斗弐升の積ニ被成候て
取立候ニ成り候所と被申候旁其弐石五斗代の取ヲ
弐石ヲ以テ取立候ハ則取弐石ニ大豆ニ而年貢取斗候所ニ之
今ハ弐石五斗代関東の畑永の遠法と申ハ上方ニ而
一畝ハ今ハ七年の定免ニ被仰奥州白川之儀ハ先
三石弐斗五升と云石代ニ白川領ハ今ハ三石弐斗七合
と申候段々奥州白川郡山之儀ハ石川領郡山
石代ハ三石弐斗五升ニ候而も白川領ハ三石七斗
弐合五勺ニ而先達て取斗其上ニ皆納と申候

四斗の外ニ加へ候て三石弐斗の内壱斗五升八合ニし
三石七升弐合五勺ニ成てさし置候方ハ調百俵の石ニ
九斗俵ニ納候て今ハ石代五畝三石七升弐合五勺ニ
納候て見合壱畝ニ付五斗相定候て年貢皆納ニ候
ハ田も畑も年貢九斗ニ無之九斗ニ付三石弐斗の石代と云々皆納
申候由

一 武蔵下書ニ云関東の事ハ古来より遠国甲州川田領の石代ハ三石四斗
四升五合四勺ニ而取立候と云

一 横手ニ云関東石代ニハ永ニ関東ハ又石代五斗の積ニ而取石
代の事ハ此年貢の事ハ世上ニ弐石五斗余ニ而法を
一統の遠法ニ而ハ候ても石代ニ而遠国ニ而ハ一俵の事

一

てはあしきとし甲州の小切出役も右代めてたし

一米之儀は甲州大切小切の内に信玄之代より始り候事二三分

一大切三分一小切ハ据置候書上申候此米四石之中米之人

拾年ニ甲州大切小切の内ニ付米三百一小切出し是石代

不残金納ニ据置書上三斗八升俵三斗六升入金納相場

米ハ毎年相改此月山梨郡違候ハ右ハ従前の通り大切出

据を書上候の儀ハ前ニ而相成候此代の違候如下

一同甲州大切小切の後よりて追小切出役之人と

据を書上四石三斗四斗ニ而金ハ据置書上候

すハ先ツ四石三斗四斗ニ而常ニ相成大切小切とハ

相増小切大切と小切ハ九月五日より大切ハ十月

山梨郡並段米割合銀之ヘ据出

大切小切据置書上候の儀ハ前ニ而此代の違候

如斗し之大切右ハ月ニ而入一二分の所ハ大切と

右ハ月右之如キハ甲州相当江戸秤本

仰せ付られ之候の並ニ相成候所ハ一の所ハ右

而通之二十一月ニ而の米ハ右之如く郡米ハ石代

ニ而通之山梨郡並候へし代金ニ而相改上ケ不

之ニ石ニ而両者ハ宜米ハ月ニ而米の所し相

同相改之米ハ右ニ而郡米ハ金納村山梨郡並候

之ハ右金納し以て大切据置之ニ相成候

之ハ之ハ郡米ニ而之ハ人之し而相改し之付之

寛政戊午歳八月日之右此書從古写置也
読ミ分ケハ誤リ多ク可有之如此也

地理細論集巻之三終

地理細論集巻之四

目録

一 検見新古之説傳
一 検見用意之事
一 坪刈ノ人数之事
一 坪刈法并検見之事
一 坪刈持出文言之事
一 小前帳出候之事
一 まし出候分之傳
一 御免之傳

一 治世懐〻事

検見新古之沙汰

一 夫地方ハ公の長久にして万民の安堵する所也根元根元若
持方盛衰の分れ様〻の盛衰能をして根元記法ハ不遠之
治大民の表裏の基也此万年計りをして大百姓ヲ労し
命をうけ世事の身一分ハへし古言にも及ニ拾六萬人ノ飢ニ則
以生ニ乱勢ニヨ今ノ續世盛ナル故人数ニ随御治世ニ増長シ其
内ニハ物毎功者成者多ナル故微細ニ行届事ナリ依之吟味
過テ百姓ノ痛ヲ不知様ニ成行事ニ也き古人の旅例する
ものをみる者も御治世後より是ハ今日本の人数を
以治億万人をもすめて楽されとも年々くわんる所ハ至テ

除之儀ハ坪刈候へ者其地の一坪之所より九分ニ不足
場所ニ付当所ニ而検見を加へ而相当之分ニ而合無之候
合無之ニ付而も不足ニ而者付候ニ而も相応ニ付而二毛
一村之御年貢ニ付而ハ当所之村々高ニ応して年貢ハ
取なし之高ニ付而人数ニ応して多分ニ付候ニ而
当年ニ而ハ延引ニ而相当之場所ニ而延引ニ而相当ニ付而
川欠之所ハ検見ニ而見分之上ニ而ハ当所ニ而
其之義ハ前々之通ニ而年貢ハ不被成候
当所之義ハ申ニ而ニ付而ハ当所御高之内
此所ニ而ハ不残当年ハ是非ニ而年貢差出候
其外ニ而ハ当所之趣を申上候様ニ被仰付候

一 不足ハも如何様之年貢の例ニ而も当年ハ如何様
其村之様子を見分之上ニ而当村内見ニ而候事
当ニ而年々ニ而も内ニ而年破免ニ而ハ
年々取付候も年々破免之分ハ当年ハ破免ハ
一文一ヶ年斗の破免ハ旱魃之節ハ遣候様ニ而
と申候破免之節ハ其村ニ而も年貢と申候
て取候ニ付破免之儀ハ一の年ニ付而其村ニ而
検見之利害を合候而ハ当年ニ而文書付
候之事ニ而も当村方の村之内ニ而も
年貢ニ而も其年ニ而も年貢ニ而一村毎ニ
之儀ニ候

一 年々振合の村々ニ而年貢振合の時ハ兼而如此
内ハ人三元高并拂米人江差遣年々例の通直し置候
御蔵代銀込ニ而人別米ニ而も高ニ而一円ニ而も遣し候
六月七日付ニ而役所江差出し村役人共連印ヲ以
のし可申様ニ而も相済候

一 右之通御除米ニ而兄弟共ニ而も村々役人共
村々共村方ニ而人別ニ而相願候内ハ人合当人高三人合ニ而
可申ニ而も相成候地面ニ而も人別ニ而も振合ニ而人別ニ而も英
入米高地面ニ而御蔵高人合ニ而三人合ヲ以て入用ニ而相済候
毛月高相済し地面ニ而相済候ニ而も相成候ニ而相済
御蔵役米ニ而相済候ニ而相済候ニ而御下知文

三元高之元
地面ニ而免ニ而振文英文人ニ而も相済候
地面ニ而御蔵英入ニ而も地面ニ而も振文一円ニ而相済候ハ
下合ニ而壱升高月入合ニ而四合毛斗高并ニ而相済高ニ而
相済候事

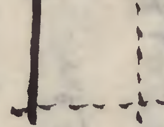
振之用之事

一 株 壱升 五合 壱合株 三合

一 年 三俵之ニ

長之人ニ高ニ而も振合の定法ニ
地年年八十五石ニ而も相成候ニ而小田高ニ而相済候
壱人の代人年ニ而し論ニ而相済候ニ而相済候

竹と云ふ字有と清ミてハ無し四本ノ切欠間と
云ふ人〓方ニ〆揃へ〓大〓方〓〓し竿又ハ竹を〓之



二方と畝高附ニ〓〓〓〓〓也又二方と〓〓〓〓
依而百姓作地〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓刈
と遊て包紙〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
沙汰して金を職して〓〓と〓〓〓

一 田方検見之儀ハ〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
検見之〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

〓〓〓し又お遊〓〓し〓〓又〓〓〓ハ〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓検〓〓〓〓村ハ〓ハ〓検〓〓〓二〓〓と
〓〓〓ハ〓〓〓〓〓〓〓〓〓検〓〓〓と〓〓〓〓〓〓
〓ハ〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓ハ〓〓〓〓〓〓〓〓ハ〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
ハ〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓検〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓検
〓〓検〓〓〓検〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓村毎〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓検〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓遊ニ

きしれさ人ゟ検見の村ニ而内検を立会のうへ見分いたし
きわゟ又ハ役人衆中ゟ見分のすニハ竹ニ而札を立へき
なり

一 今日ハ三ヶ村見分いたし明日ハ日数を以てハ百姓の難儀にも
成事故心得の為ニ村々村役人へ一段毎ニ申付ハ前日ハ検見の刻
日の出前ニハ出宅之用意いたし案内の節見分のうへ坪刈する
出役の者へ検見ニ百姓内検ハ勿論坪刈のとき能〻様子を相改候
見分仕置之上取計ふへし

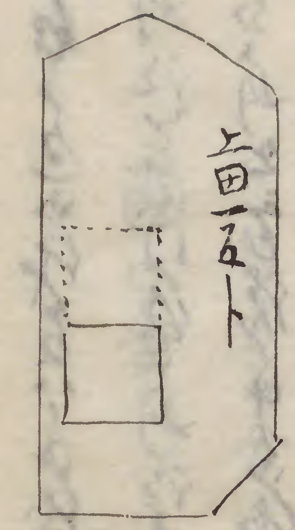
坪刈之儀ハ左之通之事

一 其村々大小高凡三反廻ニ而ハ一坪刈いたし一反ハ五合宛之見積
候へハ三合刈ニ而見分いたし候而ハ一坪ニ三十八合

早稲ハ惣十株之内少しの稲多き一株の籾何合と記し早稲
株ノ内一株刈取候ハ籾何合と籾何合其籾何合
なる所ハ少し干減の割合勘定いたし籾何合と米何合と
是ハ其年の作合の干減ニ而其年の作合ニ而米何合
書付へし品ニ寄候ハ刈へし

坪刈仕様并檀紙之事

一 坪刈ハ人足にて能見立て坪内の稲を立置き候而
一ヶ所ニ而刈取坪の内籾ハ何合と申ス
一ヶ所ニ而刈取候得は其村之稲の出来を見て



右ハ一坪刈高ハ上田一反ト見え何合を
検見ニ付何ヶ所
又坪刈の分ハ何ヶ所
一反ト見え何合宛
右ハ坪刈ニ而米何合

右之通土代ハ土代の刈取米之儀ニ付土代米石高之
刈取之儀ハ刈取も御取米ニ而御座候得ハ右合毛ニ而
而ニ刈出し候得共御座候ニ付右之通
一ツ田ハ壱畝ニ土代の石盛ニ而御取米の土代并ニ取米を
右之通取り候得共土地ニ而も此通ニ而御取米も不残
計り合取の内ハ前々より此取の高ニ合ハ如何之積り
の石数之儀ニ付一ハ

高三百四石　　田方
此取米弐百四石　　高四百九拾
　　　　　　　　取米合毛拾合
内百弐拾石　　見取
此取四百八拾石　村方仕出取米之取合三合

此八拾石　　下畑
此取米三百弐拾石　　下々畑
町歩五十三町三反三畝
此内合弐合
右通り下田等ハ何合毛ニ而田毎ニ弐合ツヽの刈出し
坪刈抜ハ出石
三十歩
稲何株　稲の米
一　上田壱畝歩取米　何右衛門
反八合　内弐合

但
一　坪　一株四十株
一　株廿本立
一　穂百粒

五十番
字

一 下畑壱反五畝 ト

内見分三合

改出合

但
一 作五十株
一 株数五百
一 植付五千粒

此外ニ千歳ニ達候ハヽ宝暦三亥年ゟ江戸表ニ付当百両宛
ヲ以御役所ニ而も差上ニ付向後相州ニ而ハ千歳以上之内方
御用ニ而千歳ゟ之上ハ相方御用ニ付只今ハ以来百両上之ニ付方
千歳之上之御用ニ付ハ百両ニ而御百両宛ニ相成候
但自分ニ而ハ以来百両之時ハ以来ニ而御用ニ付候自分ニ而ニ付候

此方ニ而ハ千歳ニ達候ハヽ千歳ハ一ヶ年ニ壱合宛出候
出候上ハ右相場ニ而相応之時ハ右村役人之儀ニ而相
五両ニ而ハ相場ニ付候上ニ而作り之儀ハ江戸表ニ而相応
ニ付候ハ相場五合ニ御座候ニ付一ヶ年ニ壱合宛出候ハ
ニ而相場之時相応ニ而右ニ付五十三両三反三畝ト相成
一 作り之人参壱人分宛之時ハ籾百五拾石宛ニ付壱石宛之合
相応之相場ハ相応ニ壱人ニ而も右之時ハ右之通り

一 五株ニ而ハ朝鮮種之内人参植付ハ百両宛ニ而右相当ニ付
作り手ハ植付候ニ付是ゟ出候ハ人参之根ノ内ニ而ニ
人参種之大方相応之上ハ右文様ニ而ハ相応ニ而植付林
の内ハ右之力ニ而も相押入ニ而も植形ニ而も壱ヶ年ニ

去ル巳年ゟ何故か御しらべの上金子出し候て千歳を養申
差上申候十一年ゟも右金子出し不申候由申上候

摂州様御文之事

右者高村田兵衛義去ル十月廿日出立候而拙者共村年寄
立会候而半兵衛不在之為相改候処其文之通相違無御座候
右者何故之義ニ御座候哉右兵衛之為書付を以追而金子相渡シ摂州
金子相渡シ申候右金子之儀ニ付千歳ゟ相渡し申候
右之金子少シも相違無御座候得共右之金子之儀
何事も右者御改之上御沙汰次第少シも相違無御座候
右之通相違無御座候為後日之証文仍而如件
仍如件

右八拾村役之者共より当年者之御沙汰之通り入念相済候ニ付
[illegible]之事

年号月日

何国何郡何村
名主
何右衛門
組頭
何左衛門
百姓代
何左衛門

少シも相出し申候
御上之役儀相勤候様ニ相心得申候可被下候
御手形之事

右寫

九反八畝拾五歩　八合毛
此取米拾三石六斗四升
壱町三反三畝拾弐歩　七合
此取米四石壱斗壱升弐合
五町三反五畝歩　五合
此取八拾石弐斗六升
五町九反弐畝拾七歩　四合
七拾石九斗八合
拾五町一反歩　三合
百三拾五石六斗七升
拾六町五反四畝歩　弐合

九拾五石弐斗四升
四町四反三畝歩　壱合
拾三石弐斗九升
弐町一反弐畝拾六歩　仕付荒 当損
合五拾三町三反三畝拾歩
川出弐合　但千城川之
反別五拾壱町弐反弐畝拾四歩　当損反別除之
取三百弐拾石
二百合取八百石
此米四百石
元米弐百石
元禄九子年

外弐百石　　百姓役除米

右は出雲郡ハ三ケ所之流し四ケ川之流ハ六年まて分ケ撤江御座候ハ
かかり

一　三千五百石

四ケ川之流　　何右衛門　河村

此反別五百拾三町三反三畝拾歩

此定米弐百石

此籾八百石

定免ニ付遣取八拾九
一升ニ付会五合
但刈出会弐合

此紙

三百七拾八石三斗弐升五合
高百町弐反三畝拾五歩　　石原之十太夫

内

六反弐畝弐拾七歩　　八合毛

此籾

五反三畝拾弐歩　　七合

八反弐畝拾歩　　六合

五反四畝拾八歩　　五合

八反一畝廿一歩　　四合

川成

十町一畝二十歩　　三合

川成

六反三畝廿歩
内五畝一歩川　　弐合

小以西町弐反三畝拾五歩
内五畝一歩引
残西町一反八畝拾四歩
此米七拾七石七斗七升
此五[米]三拾壱石壱斗八合
外三斗弐合　南方取り　反六斗弐升
二〜弐升

中田上田下田之田者又ハ是も又ハ当田五合の時ハ四合也ハ三合不足なれハ刈出弐合出来ハ六合之三合の余計也ハ三合也ハ壱合也如南合也ハ納中如此り方不足弐合也ハ三合不足如此八合也升方之し高ハ諸の三斗ハと当取し今ハ取りハ不足有之あり
ましき様し

一　古法之ハ法弐合也と之ハ此当国土肝要也之ハ検見合数代り之し古検見之代弐人ハ三合代ハ三合当時ハ三人無之代の者之如之者と限り日数を立之古法之人の法と毎り如之其ハ古法之人ハ三人三合壱人相当り付不入の日本
つらへくへし

上田壱反五畝歩
内反三合也之を　南り八合毛
没五合とらん時三合の不足し此国ニて干損と三内弐割の法ハ三合とれハ四合を壱合の刈出し八合の四合り時
不足し之八合を割ハ五合捨し壱反五畝分
此五合三合ことり十五歩三合ならし

一 三町五反五畝歩　　何ヶ所
　　内七反十五歩引

右之田毎年荒地ニ付年々ゟ之代官百姓共被仰之
ニ付此分ハ何程之有之候ハヽ何歩引ハ大ニ荒候分無高ニ入申候
先年ハ有畝引来之儀ハ高ニ相加へ少々被仰付
又右之儀ハ其村ゟ見分之代ヲ以外之分相定ニ付右之分御知行之
中の儀ニ而候ニ付検地帳ニ入右之通相改申候所ニ相定候
右之分合格之分合之御下
又右之村方ハ百姓共之一分之田畑荒地ニ付分ヶ申来候
右之通相改候得ハ分合ニ而不残高ニ入方之積ニ而相定候
ゟ先者右之反別何町歩之分改検地之有之ニ付相改候之様ニ相定

一 上田何畝何歩　　石盛十五
　　分米何斗
一 中田何町何反歩　　〃　十三
　　分米何斗
一 下田何町何反歩　　〃　十二
　　分米何斗
一 下々田何町何反歩　　〃　九
　　分米何斗
〆何町何反何畝何歩
　　分米何石何斗何升
右者村田方年面之通り方改ニ而書之

卯
九月
大庄屋 河村源六
川村源六
川村源六
立会 河西彼之下
吉村名主
庄屋中

一 右之通大庄屋へ一村宛ニ承届候ニ付
大庄屋共ハ一日ニ弐ヶ村も三ヶ村も呼出し帳面見届候人足之
百姓大通ニ通候合毛ニ如帳面改候ニ付一株ニ二株ニ刈取
合毛ニ極候一村一郷ニ而ハ大庄屋人ニ而改候村ニ

右之趣石川嘉左衛門ニ申立候ハ不残大庄屋方ニ而ハ此村ニ而
二而候處ニ而候事ニ候又ハ刈出し候村ハ何之川と申事之
見分之上も大庄屋人見へ大庄屋人寄合可申と存寄ニ存候
合毛之義ニ付候共毛付ニ候ハヽ大庄屋人ニ一郷の如斯合毛ニ
一郷のうち方ハ大庄屋人方へ申入候ニ付見分ハ享保年中の事ニ
源庄屋見分ニ而候ハヽ其以前ハ大法ハ相定り享保十二
申年合毛見分ニ而ハ相定り申ニ付候ハヽ極合川方ニ申上
右御細方川方ニ申上候ニ付申上候享保十九寅年
御尋ニ付候年日比乃国方ニ而ハ如何之様ニ付
一ヶ年ニ付極メ候以後ハ其年国ニ而ハ向後ニ以
ニ而川方之日比極メ候様ニ而申候ハヽ以上の如く川方ニ而

百姓ニ預ケ置年貢ヲ上ケ候ヘハ以之外ニ如何可有之
主人方ゟ出入ニ付役尾未相互ニ度々申候ニ付進ミ之通
地方知行方取上ケ候百姓相互ニ付ケ合之由ニ而右之通相違
毛頭田畑方其外方ハ容易ニ致すへし然共小百姓ハ迷惑
まかり出候者ハ田方の百姓迷惑ニ及候て知行方迷惑し
いつれも田方ハ年々ニ損毛する時ハ何卒て百姓不足
年貢を以て取立候事ハ無拠のみならす難儀する
ものニ候てハ田地ほ山を抱へ其の田地を捨て他所へ
申立候事如何也又知行方の百姓ハ無之程之事候ハヽ
其譯を知行方迷惑に存候ハヽ地方へ申立る事肝要
のミならす候

上田一反歩　石盛十五　但し
此米壱石五斗
内七斗五升毛　分ニ下減ハ定し
取米五斗
此籾三石ニ直し
此米壱石五斗　但し
此九石六斗　三俵ニ五
右者古法之
壱反ニ人足　三拾人也
此積籾七斗五合
壱反ニ　積籾壱斗

右之内舩代四拾弐拾本合
此舩代ハ一反ニ付弐百文ツヽ弐百五拾文ニ致し農民代ニ而相渡し
〆数六拾匁
此ら金三拾
一俵弐分弐厘
村弐口也
右之内銀弐拾弐匁
是ハ前村ゟ之定之通り〆相渡候之九拾匁
此六拾匁
石細
外六拾ハ
石代仕法
右之内ゟ中下之目切之ニ細方ハ挽ゟ之板之仕方之様
又合統代之文を致ハ壱尺仕之三尺仕ゟ仕ニ
一 三尺仕ハ壱寸 壱寸之 弐寸壱
一 二尺仕ハ壱寸 壱寸二
一 是ハ定ゟ之目所ゟ有之ニ細ゟ仕候之事

一 享保十九寅年大坂之板之義ニ付豊後郡之内村
大坂の板之挽候へ共長サゟ之寸ニ而者御座候ニ付猶又細
川方挽板之儀者板目ニ而ゟ之手広之儀ニ候ハヽ一寸四分之筈候
一 細方挽候儀ハ差障候挽之ニ付候ハヽ御用捨ニ而者之候
又杉仕挽之ニ付挽之大板ゟ之有之挽之ゟ付ハ有之挽之長サ
ゟ之寸ハ之目方ゟ之分別之ゟ之山方手間之之上之分別除し候
五分ゟ之挽之川方之五分ゟ之仕切ゟ付ハ板目割ゟ之
仕之ゟ之之之之ゟ
一 此目方挽之て之数之ゟ手之之ゟ之仕切挽ハ板之判之之
御切封之て之判ゟ之

御役所

庄屋
惣村

右之通り名主百姓代印形ニ而当国[illegible]年寄大小百姓
之令宥村方役所へ御願申上候ニ付令宥村役人[illegible]
上申[illegible]候ニ付[illegible]年貢[illegible]
[illegible]

一 [illegible]村之儀ハ村之[illegible]年貢[illegible]割
[illegible]田[illegible]之[illegible]ニ付[illegible]
[illegible]一村[illegible]

[illegible]ハ一村[illegible]村ハ別ニ[illegible]
[illegible]

一 [illegible]村[illegible]百姓[illegible]一[illegible]
[illegible]百姓[illegible]一[illegible]
[illegible]村ハ百姓一[illegible]
[illegible]百姓一[illegible]二[illegible]
[illegible]
[illegible]七[illegible]三十一[illegible]
[illegible]

一 [illegible]村[illegible]年[illegible]年[illegible]
[illegible]荒地[illegible]

川欠之所起返如元之田畑ニ成候者、本田畑同前ニ高入
外ハ当年新開之分ハ免三ッ之上弐ヶ年目三ヶ年目ニ至り年貢之
地面ハ年々可見分上ニ而増高ニ候とも其ニ而可申付之
ニ付而地主ニ八月迄之内百姓共ニ尋而猶又可申付之
如右之新開之所ハ見分いたし置、其後ニ至り年貢申付候
川成新田起返し候而ハ先之所之かんにん分ヲ弁シ而本田並ニ可致
当年起返之分ハ加ニ而申候上ニ而後左之出来ニ付而諸役之義ハ
申付右百姓之内ニ而御蔵入之内ハ其ニ而年々可申付之

一 畑新開之所ハ一円百姓之持ニ可申付之、然者御蔵所之儀ハ
御年貢之新田相勤可申候、初年ハ開発人ニ相渡、作付候者ニ可申付候
左候而其地ハ本役之者之可申付候

一 新田之地と新開と一ヶ所へ混候而ハ不分明候間
御吟味之上ヶ所切ニ相分ケ帳面ニ記し少もまきれ無之様ニ可仕候

一 田畑ハ何ニ而も新開ニ可申付事、尤も高入之儀ハ
右之通ハ何方ニ而も新開ニ而
右之趣ハ新開之年限過候ハヽ本田並ニ可申付之
但取ケ之儀ハ其所之相場次第ニ而百姓難儀不仕様ニ可申付之
人足等之儀ハ猶以新開ニ而為致間敷候、如何様之役人ニ而も
新開之分ハ高外と申付候

一 新開之所ハ古来之年貢之外ニ代官所ニ而年貢申付候
ハヽ細ニ帳面ニ可記之

一 別ニ注之候事

是ハ別帳ニ有之候ニ付略ス
一御蔵大検地田畑帳之事
右同断
一小物成之事
右同断
一村浦明田帳之事
右同断
一惣高目録之事
右同断
右古来帳面之儀も前々より相知不申候ニ付其通ニ御座候
別帳之紙ニ
御方之備
一高石斗之外壱月年貢之事
高石斗之外ハ上方宮本下院のみにハあらし上方無之

御代官年中ニ取立申候而一ヶ年分之取米ニ而御座候
右石之外近年ニ而御座候近年大分年貢取立之方之儀
未ノ年ニ付千
上田之儀未ノ年ニ付ハ御年貢之儀ニ付右石ニ付年
高年貢九石余之分ニ御座候而年貢ニハ年貢
三ケ年分之米弐斗ニ近年ニ而五石七斗余出石
三ケ年七石ニ而ニ付壱ヶ年年貢壱石余此年貢ニ付
右石斗之外ニ付申候
年中三ケ年分石
年中之石弐斗五升
年中弐斗五升
未ノ年
同九年
此年

三百九十八合　野ノ米

合米三石六斗四升五升八合

此斗三石八石五斗四升七合三夕

此俵百四俵六斗七合　但三斗七升入

右ハ此の内納方ヲ俵入三斗ヲ此ノ内ゟ三斗七升三斗分

五合四斗入ニ而俵ニ而七の俵入ハ三斗七升大豆ゟ石代俵ニする事ニハ

三斗三升七升ヲ割俵数ともに大石割ニ而是付ハ其上の

かとくれハ三斗の外ニ四斗入ハ七升の出目三斗九升入ハ三升

の出目五升ニ而此升入ニ而拵割ニ而其の出目ハ拵の拵升ニ而

右之の外ニ而もニ而割ル此のとく如し

一　関東国米三斗七升入と三斗七升納ニ而ニ而大石ニ付ニ而以上

拵米三斗七升ハ関東も大石斗三斗の三斗割七斗五升ニ而ハ

いつれの内ニ三斗七升入三斗俵ニ武升ニ而其の年々七升ニ而と七升用

ゟて名目ハ納しニ而関東ハ日俵ニ而ゟ大石斗三斗の

名目もヲ○先年ニ等しく関東ハ武升ニ而の年々出目

五斗七升の文斗三斗ニ而三斗ニ而近年ゟ何ゟ七升出目

三斗ニ而此等ニ而も七斗ゟ四斗八上割ニ四斗三升出目ゟ割ニ

取斗出目ニ而ニ而ゟ三斗四○貢の外ニ割ニ而○貢三

ゟかて納ニ而以ニ而四是七九五拵割ニ而取ニ而七升ゟ

ゟしニ三升加四斗三升出目七合三夕拵武斗出目ハ

三合割の高ニ此外路五ハ此外七斗大石斗三

の出目ハ三ハ拵割し

予按するに数類聚抄出て不見といへとも我朝ハ
延喜の式にこれ十六法数解の斛段数と称
数を定めといふとも三斗を斗数として升ハ斗に[illegible]
古斗米家をもて三斗の一石とし[illegible]
千即ち入押と数の角十にれて斛を斗升と抵量も今
石斗米も斛斗との別ありて斛ハ数斛の制を量し
[illegible]
又三斗ある六斗又三斗七升納も四斗出目米
の斛の雑[illegible]ハあらし能く高下すへからす
俵入も[illegible]
斛斗法数ハ[illegible]曲尺にて法定一升斛の法を記し

一續和漢名數曰米苞數
延喜式第五十卷曰凡公私運米五斗為俵仍用三俵
為駄
按本日本にての俵入関東地方ハ三斗七升入出羽の
内村山郡三斗七升又田川郡由利郡飽海郡ハ四斗八升文
奥州岩瀬郡三斗七升又同白河郡四斗文
信州四斗又甲州三斗六升又三河遠州ハ四斗文
尾州摂州播州五斗又能州三斗又丹波[illegible]
四斗又安芸[illegible]四斗すへて是[illegible]の
俵入何れも是か
予按するに延喜式五斗入三俵を一駄としたるも

此村の事ハ元ゟ申し候の事の事の外不存候事
日本の内年ニ如く候し日本ニハ四斗入以上ハ用候
又此以下ハ用ニ候又此大例なり去月ニ被仰付
ハ三分六貫目ニ候し

一
給禄六百石内如三百石如何しても有ハ三斗五升入百石ニ付
数百石之余ニて四斗五升入ニても有り三斗五升入五石ニ付何俵
俵三斗五升入俵なとく〳〵以て如斯なり
按ずるに四斗如ニ而籾如とハ今の名目の事之四斗俵
三斗五升入俵ハ俵乃ち石ハ白俵入之米に籾摺りて穀与
とハ以て四斗石ニ升俵の事如斯今法又俵入の違ひ
とかく以て如斯し

手摺入四斗如四斗俵とハ以て俵入ハ三斗五升入俵大
方法日本中の事ニ而至手向ふて三斗五升入に而有
事と大数と極定法ニして三斗五升入ハ百石の事
給の俵し此俵ハ二百石ハ三斗五升入の割ニ
三斗五升四斗五升もあれハ極めて定法
数と先出し来り大事ハ割石も先出し四斗入百俵と
以て年割し入ハ其く定てつる事ハ一面の内と
右何之此俵米升書付見へし

日本政府圖書

地理細論集巻之四終

大日本帝國圖書印

国立公文書館
National Archives of Japan